

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 19 日現在

機関番号：14101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381196

研究課題名(和文) 音楽的経験に関するPerformance Assessmentの開発

研究課題名(英文) Development of Performance Assessment for Musical Experience

研究代表者

根津 知佳子 (Nezu, Chikako)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号：40335112

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：Performance Assessmentとは、何らかの課題や活動を実際に遂行することにより評価するものであり、Wiggins, Gによって定式化された評価法である。開発のためには、評価課題(パフォーマンス課題)の開発と評価基準(ルーブリック)の開発が必要となる。本研究では、前者に関して、音楽的経験における相互作用の可視化を企図した課題を創出した。また、後者に関しては、米国のプロジェクトを援用し、教員養成における事例シナリオに関するルーブリック作成し、大学の授業で試行した。

研究成果の概要(英文)：Performance Assessment is an evaluation method developed by G. Wiggins that conducts evaluations based on any tasks and activities that have been performed. For its development, it is necessary for evaluation tasks (performance tasks) and evaluation criteria (rubric) to be developed. In this research, for the former, we have created tasks that aim to visualise the interactions in musical experience. For the latter, we used a project from the U.S. to create a rubric regarding case scenarios in teacher training, and conducted trials using university lessons.

研究分野：音楽教育学

キーワード：パフォーマンス評価 ルーブリック 音楽的経験 ウィリアムズ症候群 音楽的対話

1. 研究開始当初の背景

音楽科教育では、表現と鑑賞の活動を基盤として学習が展開される。音楽科で重要な非言語活動も、近年求められている言語活動の充実も、発達初期段階の「音楽的対話」の充実が基盤となる。

このような「音楽的対話」を重視した音楽的経験を軸とし、カリキュラム開発やコンテンツを蓄積してきたが、現場での応用のためには、文脈に左右されずに客観的な質保証が可能な Performance Assessment (以下 PA とする) の開発が急務となった。PA とは、何らかの課題や活動を実際に遂行することにより評価するものであり、Wiggins, G. によって定式化された評価法である。重要なことは、リアリティのある場面で知識・技能を用いながら行われる実演やその成果物を通して評価するという点である。

音楽科教育における PA に関しては、音楽的思考過程の質的評価を論じた横山・小島 (2012) や、真正な評価論に焦点を当てた小山 (2013) の先行研究がある。また、中学校の鑑賞の授業を対象とした横山 (2011)、薄田・原田 (2013)、小学校の授業を対象とした椿本 (2012)、小川 (2012) など授業研究領域で報告されている。これらの先行研究で共通していることは、言語活動を重視している点である。

一方、筆者が一連の研究で焦点を当ててきたのは、言語活動ではなく、非言語活動である。とりわけ、発達の初期段階・感覚的運動段階の活動 (乳幼児～幼年期段階) を展開できる実践者の育成が急務であることや、小学校低学年の2教科 (生活科と音楽科) において、真正の学びが成立し難いことが明確になり、対象を幼年期に焦点化し、その実践に携わる関係者の養成を視野に入れることが喫緊の課題となった。

2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、音楽的経験に関する PA を開発することである。前述のように、音楽科教育は、表現と鑑賞の活動を通して展開される営みであるため、活動の充実および真正の学びを担保するために、実践者には様々な力量が求められる。特に音楽科教育においては、言語活動の充実が叫ばれながらも、やはり対象者の非言語行為をどのように解釈するか、という実践者の臨床知が問われることに変わりはない。そこで、第二の目的として、実践者 (養成段階を含む) の PA の開発を行う。

3. 研究の方法

これまで、「音楽的対話」のミクロ・マクロ分析の方法の開発、音楽的経験を重視した活動を軸としたカリキュラムの開発を推進してきたが、音楽的経験の浅い実践者から、「音楽的対話」の具体的な方法と評価の可視化を求められている。

(1) パフォーマンス課題の開発

本研究では、PA を可視化する方法について、具体的には、Williams Syndrome (以下、WS とする) を対象とした PA の開発し、可視化する方法を開発する。

WS の音楽能力や言語能力に関して、社会的で明朗な性格や絶対音感に注目した言説が多いものの、他者との文脈における WS の繊細な感性に関する理論的研究は少ない (根津, 2007)。感性を「履歴を持つ空間における身体配置 (桑子, 2001)」という視座で捉え直した場合、WS の「聴覚的情報能力 = 視覚的情報能力」および「表出言語 = 理解言語の能力」のバランスの特異性は、むしろ音楽的空間での感性の豊かさを助長していると考えられることができる (根津, 2008)。

音楽的空間における間合い感覚や音楽への親和性に関する先行研究として、沼田 (2004) の記号論的解釈を基盤とした「音楽的対話」の分析があるが、非言語レベルのグループ活動に関する研究は進んでいないのが現状である。

【PA の開発】ここでは、丹野・折山 (2000) による楽曲をモチーフとし、ピアノ連弾 (2 名 × 2)、鍵盤ハーモニカ (1 名) 打楽器 (3 名) のためのパフォーマンス課題を行う。

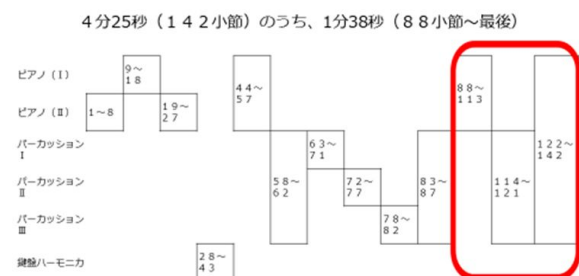


図1. 分析の対象の可視化

芸術プログラム (2002 - 2014) に継続的に参加している 8 名 (11 才 ~ 23 才) のアンサンブルを対象とし、K. Schumacher (2008) の手法を参考にし、同期性の変容を明らかにする。

【PA の開発】

WS の療育・教育においてもっとも課題とされている視覚認知と運動機能の障害に焦点を当てた実践 (リトミック・ダンスなど) も年々増加しているが、研究報告は、根津ら (2005) 以降見当たらないのが現状である。WS が、イメージを身体表現 (パフォーマンス) することを不得手としているのは、第 7 番染色体の片方の q11.23 領域の約 20 の遺伝子組の欠失に起因するものであることから、以下の 3 点を重視した PA を開発する。

パフォーマンスの内容について、知識があること
表現者も鑑賞者も、そのパフォーマンス

スの内容について知識があることつまり、文化的共有が可能なこと。
動作（所作）について、客観的に評価が可能であること

(2) 実践者のためのループリック作成

高等教育実践の評価ツール開発の先駆的な取り組みとして著名な2007年から2010年までの米国のVALUE (Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education) の評価項目を参考にしたループリックを作成・試行する。

4. 研究成果

(1) PAの開発

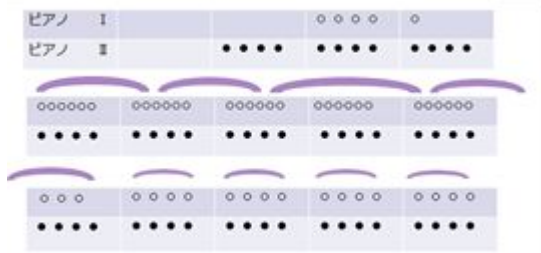


図2. アンサンブルにおける同期性

PA に関しては、メロディーやテンポなどの特定の音楽要素に対する調律行為よりも、他者のおかれている状況に対する調律行為が表現行為の基盤となってることを図形楽譜として明示することができた。

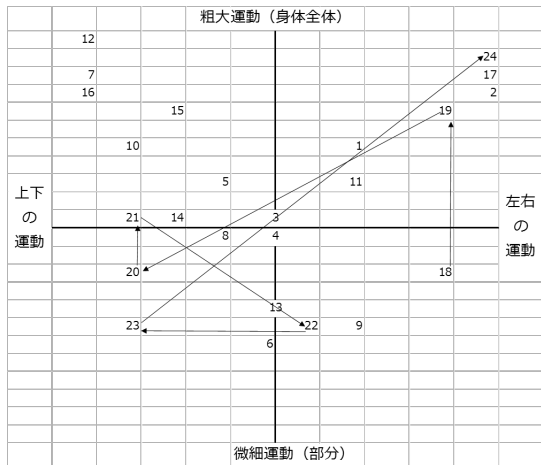


図3. 運動の領域

また、PA に関しては、図3のように「粗大な運動 = 微細な運動」および「左右の運動 = 上下の運動」の2軸により4象限に分類し、歌舞伎ダンスで経験する運動を俯瞰することが可能になった。

(2) 実践者のためのループリック作成

「対話的事例シナリオ」の評価項目を抽出し、米国のプロジェクト研究と照合した上で、簡易ループリックを作成した。開発したループリックを授業で試行した結果、学生の思考過程を可視化できることが示唆された。また、ループリックによって、ガイディングクエスチョンの改善やグループ活動のあり方など、授業における対話の質的な改善に関する具体的な課題を明らかにすることができた。

VALUE では、教養教育によって形成されるべき能力として16領域の力を「知的・実践的スキル」「個人的・社会的責任」「統合的・応用的学習」の3つに分類しているが、VALUE、(2015) 今後は、教員養成や保育士養成に適用可能かどうかを検討する予定である。

| 評価項目 | 4 | 3 |
|----------------------------------|--|--|
| 【シナリオとの対話】 問題のとらえ方 | シナリオの多声性を理解し、総合的に問題をとらえることができる。 | シナリオの多声性を理解し、分析的に問題をとらえることができる。 |
| 【シナリオとの対話】 文脈性 問題の複雑性の捉え直し | 問題の多種多様な文脈要因を認識し、問題解決しようとしている。 | 問題の多種多様な文脈要因に気づいている。 |
| 【他者との対話】 他者理解 | ガイディングクエスチョンに即して、他者の意見を理解しながら、事象を解釈することができる。 | ガイディングクエスチョンに即して、事象を解釈しながら自分の意見を述べることができる。 |
| 【他者と自己との対話】 相対化 | 自己や他者の考えを適切に分析し、対話の文脈を重視している。 | 自己や他者の考えを対話の文脈内で意識している。 |
| 【学習の統合】 普遍化 自分化 | 複数の分野・領域を統合させて、新たな課題を構える。 | 複数の分野・領域を意識して課題を解決している。 |
| 【観の変容】 | 他者の観を理解し、自らの観を再認識し、変容を自覚できる。 | 対話を通して、他者の観と自らの観の相違を認識できる。 |

図4. ループリック

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

根津知佳子・森脇健夫・山田康彦他 6 名：
教員養成型 PBL 教育における対話型事例シナリオの評価の開発、三重大学高等教育研究、査読有、第 23 号、2017 年、pp.69-79

根津知佳子・後藤洋子・川見夕貴：
Williams Syndrome の Performance に関する研究～歌舞伎ダンスの創出を通して～、日本音楽療法学会東海支部研究紀要、査読有、第 5 巻、2016 年、pp.39-46

守山紗弥加、松本金矢、根津知佳子：芸術プログラムにおける造形活動形式の提案「屋台」が育むもの、三重大学教育学部研究紀要、査読無 Vol.67、2016 年、pp.403-409

https://mie-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3626&item_no=1&page_id=13&block_id=21

松本金矢・甲谷俊紘・端崎裕太郎・根津知佳子・中西康雅：最適設計を利用した手作り打楽器の開発、日本産業技術教育学会誌、査読有、Vol.57、2015 年、pp.251-258

前原裕樹・山田康彦・森脇健夫・根津知佳子他 5 名(4 番目)：教職課程において、教師の権威・権力をどのように教えるのか、愛知大学教職課程研究年報、査読有、第 4 巻、2015 年、pp.49-62

根津知佳子・川島正樹：“音楽的場”としての音楽科授業～教師の観を中心に～、三重大学教育学部附属教育実践センター紀要、査読無、第 35 号、2014、pp.13-18

〔学会発表〕(計 11 件)

中西康雅・根津知佳子他 7 名(5 番目):
教員養成型 PBL 教育の課題と展望(14)

ループリックによる評価にもとづく対
話的事例シナリオの改善、第 23 回大学
教育研究フォーラム、2017 年 3 月 19 日
京都大学(京都府)

根津知佳子:日本の音楽療法の発展と課
題(招待講演)北京市豊台区豊台婦幼保
健院研究会、2016 年 6 月 25 日(中華人
民共和国・北京)

根津知佳子:音楽活動における生命と感
性 1~教科書教材を中心に~、第 11 回日
本感性工学会春季大会、2016 年 3 月 26
日、神戸コンベンションセンター(兵庫
県・神戸市)

松本金矢、根津知佳子、菊本希:音楽活
動における生命と感性 2、第 11 回日本感
性工学会春季大会、2016 年 3 月 26 日、
神戸コンベンションセンター(兵庫県・
神戸市)

川見夕貴・根津知佳子:ヴィジュアル系
音楽における生命と感性、第 11 回日本感
性工学会春季大会、2016 年 3 月 26 日、
神戸コンベンションセンター(兵庫県・
神戸市)

大日方真史・赤木和重・根津知佳子他 6
名(7 番目):教員養成型 PBL 教育の課題
と展望(11)生活指導分野における対話
型事例シナリオの開発、第 21 回大学教育
フォーラム、2016 年 3 月 14 日、京都大
学(京都府)

山田康彦・根津知佳子他 7 名(2 番目):
教員養成型 PBL 教育の課題と展望(12)
対話型事例シナリオ教育の到達点と評価
方法の開発、第 23 回大学教育フォーラム、
2016 年 3 月 14 日、京都大学(京都府)

根津知佳子:教員養成型 PBL 教育の理論
的・実践的到達点と事例シナリオの位置、
第 21 回大学教育フォーラム、2016 年 3
月 14 日、京都大学(京都府)

根津知佳子:Williams Syndrome の調律
行為~パフォーマンス課題の分析を中心
に~、第 15 回日本音楽療法学会学術大会、
2015 年 9 月 13 日、札幌コンベンション
センター(北海道札幌市)

根津知佳子:対話型シナリオによる教員
養成の可能性(招待講演)学び教育フォ
ーラム、2015 年 8 月 1 日、三重大学教育
学部(三重県津市)

甲谷俊紘、端崎裕太郎、松本金矢、根津
知佳子、中西康雅:最適設計を利用した
手作り有音程打楽器の開発と実践による
改善、第 32 回日本産業技術教育学会東海
支部大会、2014 年、12 月 6 日、中央生涯
センター(愛知県・刈谷市)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根津知佳子(NEZU Chikako)

三重大学・教育学部・教授

研究者番号:40335112

(2) 研究協力者

後藤洋子(GOTO, Yoko)

三重大学・教育学部・教授

川見夕貴(KAWAMI, Yuki)

菊本希(KIKUMOTO, Nozomi)